The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	解説『手繰舟』 : 手繰舟と阿知子顕成
Author(s)	永野, 仁
Citation	語文. 1980, 37, p. 59-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68668
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

解説『手繰舟』

――手繰舟と阿知子頭成――

永野　仁

『手繰舟』について、『誹諧渡奉公』（大鹿汲浅編、延宝四年刊）、『誹諧書籍目録』（阿誰軒筒井庄兵衛編、元禄五年刊）はともに、その撰者を堺頭成、冊数を七冊、刊年月を寛文十二年七月とする。大阪大学付属図書館蔵土橋文庫（土橋家旧蔵本）の該書は巻三・四・五・六、四冊の零本であるが、巻一、二、七の三冊は伝存を聞かず、現在のところこれが唯一の伝本である。

『国書総目録』に記載の柿衛文庫蔵巻六一冊は今見当らぬとの御回答であった。岡田柿衛翁の御記憶では写本だったかとのことである。堺市立図書館蔵の大野翠峰著の稿本『堺俳壇史の研究』に昭和十四年執筆の「てぐり舟」なる一文があり、岡村槐軒氏が巻六を所持する由の記事がある。後嗣岡村平兵衛氏に問い合わせたところ、戦災で焼けたのか見当らぬとの御返事であった。なお、先年、前田金五郎氏から、東京教育大学に零本があるようだから筑波へ移転せぬうちに見ておくようにと御教示あり、中野沙恵氏を煩わせて探して頂いたが、これは同名異書であった。表紙に「手くりふね」と打付書したこの本は、序・跋に徴すれば新井金堤編の葛飾浦の地誌で「勝鹿図志手くりふね」が本来の書名である（後半部に成美・鬼卵・卓池・士朗・長斎・乙二・白雄らの発句を収める）。

『手繰舟』は、巻六の一部が檀上正孝氏「手繰舟所収松山玖也判百番誹諧発句合」（『近世文芸稿』14号、昭和43年8月）に翻刻されたが、全体としては未翻刻であった。このたび本誌33、34、36、37の各輯に影印紹介されて広く活用され易くなった。以下、書誌と撰者について大略を記すこととする。

一、『手繰舟』書誌

書型は横型の中本（縦一三・六cm×横一〇・二cm）で、零本四冊。すべて、浅葱色表紙で左肩に無辺の題簽がある。表紙・題簽ともにもとのものと認められる。以下、各冊について記す。

巻三　〔題簽〕伝具利舟三　〔目録題〕手繰舩巻第三夏　〔内題〕手繰舩巻第三夏　〔丁数〕三十九丁　〔行数〕半丁に十二行（以下同じ）　〔柱刻〕夏一～夏卅八（最終丁には柱刻なし）　〔内容〕目録二丁。本文三十七丁―夏季発句。

巻四　〔題簽〕手繰舩四　〔目録題〕手繰舟巻第四秋　〔内題〕手繰舟巻第四秋　〔丁数〕三十八丁（但し、二丁目は重丁で、丁付は三十九丁まである）　〔柱刻〕秋一～秋卅九（但し二丁目は「秋　二三」と重丁になっている）　〔内容〕目録二丁、本文三十

六丁―秋季発句。

巻五　〔題簽〕てくり舟五　〔目録題〕手繰舟巻第五冬　〔内題〕手繰舟巻第五冬　〔丁数〕二十六丁　〔柱刻〕冬一～冬廿六（但し、二丁目は柱刻なし）　〔内容〕目録二丁、本文二十四丁―冬季発句。

巻六　〔題簽〕伝具利舟六　〔内題〕手繰舟巻第六戎嶋発句合　〔丁数〕三十五丁　〔柱刻〕戎一～戎八。一～廿七。　〔内容〕序（維時寛文十一年／辛亥之朱律／阿知子顕成）三丁（三丁目裏は空白）、戎嶋発句合（四季発句百句）五丁。序（寛文九年三月中澣　松山玖也）一丁、作者名寄半丁、百番俳諧発句合（玖也の発句による判を付す）二十五丁半。

巻六の序文は左の通りである。（濁点と句読点は私に付したもの）

「四の海波静にして、民の草葉も茂れ、松山ざんざとうたひ、雲ゐの舞鶴羽うちはをひろげて左右にかければ、岩本の泥亀・鰐足をのばしてじたんだをふみ、千世万代をたのしぶ此時にあたりて、寛文八年神無月十日の夜、西吹風すこしあたゝかに、沖の汐さい聊はやきやうに聞えて、堺の浦戎のはまに新嶋ひとつ出来たり。はやくより其形ばかりは有しとかや。又、同年霜月、此所に霊亀ひとつうかびあがれり。そも〳〵亀は時君といひ、又、五総と名づけて、千歳に五たび蓮葉の上に遊ぶと云り。かた〴〵久しかるべき御代の嘉瑞なるべし。その湾道は大船数十を入べし。かゝれば所の人きそひ集りて、昔より此所に有けん石像の恵美酒を祭て、更に板橋を渡し神倉を建て、戎嶋又亀嶋と名づけ、新造の人家軒を双て遊観道遙の地とす。されば、地引のあことゝなふる声は近く枕の下の潮にながれ、手ぐりの船ばたをたゝく音はたゞ此軒端の波に寄来て、逸興なゝめならず。前はをのころ嶋南北に流れて四国の山千重にかさなり、後は伊駒の嵩・葛城の峯雲のようにそびえ、南は紀路の遠山和歌のうら浪に立つらなり、北は住吉・難波の浦につゞきて武庫の奥なる山も雲の中に有べし。さるによって、此境ちかきほどの人はさらにもいはず、遠く聞、杳に見て朝夕あつまり来れる人、市のごとくにして、此浦の繁栄今この折ふしとみえたり。しかれば、其道々のすきもの、或は詩歌を作り、或は連俳によせて、此嶋をことぶく事すでに砂重せり。しかはあれど、此まゝ浦の藻屑とともにくだし侍らんも口おしくて、今かき集むる手ぐり舟のつゐでに、さあらぬ発句をも少々しるし加ふる事になりにたり。

維時寛文十一年
辛亥之朱律　　阿知子顕成　―

「君が代の久しきためしに引なるさゞれ石、岩城と云所に三とせばかり在し比、所のすきものども俳諧の発句をもゝの数につがひていはく、詞をもて判じたるはしきりのとし数多目馴たればめづらしげなし、こたみは発句をもて勝まけの品を定むべきよし、いよ〳〵短才叶がたければたび〳〵固辞すといへども、懇望のがれがたく、一つがひの下に各一句を書つけ侍るも、且は金玉をけがし、且は人の物いひさがなき世をいぶかりおもひて、をづ〳〵望にしたがふものならし。

寛文九年三月中澣　　松山玖也　―

なお、四冊とも、題簽に林という方形朱印が捺されてあるが、この印については未考。

本書のもとの冊数と刊行年月について拠るべきものは、はじめに述べた古俳書目録の記事のみである。現存巻六に刊記がないのでそ

のあとに更に一冊存したとしても不都合でないし、後述する顕成撰の他の二集と同様に付句部と句引が最終冊として備わっていたと推測するのが自然であろう。巻一、巻二の二冊（あるいは巻二一冊）が春季発句であったことは、桑折宗臣編『詞林金玉集』に本書の春発句八四句が引かれていることから明らかである（『図書寮叢刊・詞林金玉集』、および上野洋三・越智美登子編「詞林金玉集による古逸俳書句集」、島居清編『俳諧攷』参照）。夏・秋・冬がそれぞれ一冊だから、春も巻二一冊であったとも考えられ、その場合あらためて巻一の内容を推測しなければならないが、今のところ私はその手掛りを持たない。「戎嶋発句合」の顕成序の日付（寛文十一年夏）からほど遠からぬ頃本書全体の編集を了えたとすれば、その翌年七月の刊行は自然なことであろう。

本書への入集者名とその句数は、今栄蔵氏が整理・計算して「貞門談林俳人大観X」（七人社『近世文芸資料と考証』10号、昭和53年2月）に示された。本書の活用に大いなる便宜である。

原本にはほんの少しだが虫食いがある。縮小影印のため読みづらくなっている個所につき試みに判読したところを参考として記す。頭の数字は、ページ・段・行である。

巻三　（33輯）

7上9（玖也）かけるか子規
7下3（正信）まち人そ
9下3（幽明）諸行無常鳥
10上9（可広）くゝる新茶哉
10下3（重庸）数かく夏茶碗
15下2（宗静）稲妻ハ……上絵哉
16上8（一守）むくけ哉
16下2（友也）仙翁花

巻五　（36輯）

13上10（詞書）巻軸に

巻四　（34輯）

10上11（空声）うら盆や
10下2（云捨）夏ハおハリ
11上10（幽明）負てたゝん
11下2（安直）背中にも
13上10（作者不知）馬ハあれと
14下2（幽明）かけかねや

巻六　（37輯＝本輯）

49上1（62番評）声打そへて
51上1（70番評）くへさくろ甘きも
52上1（74番評）樽のかた見
52下12（78番右）置まとはせる

二、撰者・阿知子顕成

顕成について生川春明の『誹家大系図』は、

顕成　山井氏、通称林菴、名定宣、阿知子ト称ス。泉州堺南庄ノ人ナリ。医ヲ以テ業トス。家書、境海集・同後集・手くり舟。

と記すが、これには多々疑問がある。前田金五郎氏は「地方俳壇としての堺」（『国語と国文学』昭和32年4月号）に、この記事について「典拠を知らない」とし、「ただ『阿知子氏』と諸書に見えるから、阿知子は苗字であろう。従って慶長九年絲割符貿易制度実施の際堺絲割符年寄を勤めた安知子宗寿以来七代に亘って同年寄役であった安知子家の一族でないかと思われるが。未詳なのは残念である」とされた。家系についてはこの推測を越える何事も言い得ないが、その他のことについていささか判明したので、右の記事を吟味してみたい。

姓　姓（苗字）は前田氏の根拠により「阿知子」と決定してよい。時に「阿智志」（『時勢粧』）、「阿智子」（『桜川』）などの表記があり「アチシ」と訓んだのであろう。「山井氏」とするのは明暦四年刊『鸚鵡集』のみ。別姓と考えるべきか。未詳。

名　「定宣」とするのは錯誤であろう。明暦二年刊『玉海集』に

「阿知子定宣」があるが、これは顕成のことでなく、同年刊『夢見草』に出る「奈良屋十左衛門定宣」と見るべきである。『夢見草』には別に「阿知子作左衛門顕成」があるからである。顕成の名は俳書に登場する前に連歌資料に現われており（後述参照）、連歌においては実名（名乗）を用いる（受戒ののちは法名を用いるようだ）のが通例だから、年令から見て「顕成」は実名であろう。その訓みは、本書『手繰舟』巻四の次の前書と句から考えるに「アキナリ」ではなかろうか。――「顕成参会に／言葉や実あきなりの茄子種大阪了水」。

通称　前出『夢見草』により「作左衛門」と判る。

号　寛文十二年刊の狂歌集『後撰夷曲集』作者之目録に「林庵　顕成」とあり、後述の『土橋宗静日記』延宝二年部に「阿知子顕成入道林庵」とあり、延宝四年成『古今誹諧師手鑑』所収短冊の添書きに「阿知子林庵」とある。入道・法体して「林庵」と号したのである。

住所　「南庄」は不審である。『後撰夷曲集』作者之目録では、「和泉堺南庄」と「摂州堺北庄并所々」とを区別し「林庵　顕成」を後者に部類する。俳書はいずれも南庄・北庄の区別なく泉州堺（境）で一括するから、証拠はこれ一つに限られるが、元禄二年成立の『堺大絵図』（前田書店出版部刊、昭和52年）を見ると阿知子氏の屋敷として阿知子太郎兵衛（市弐町）、同掛屋敷（十間筋）、阿知子治右衛門（神明山口町）のいずれも北郷に属し、顕成がこの一族であると仮定するならば、北庄（正式には「北郷」で、これは俗称）とするのが穏かであろう。

業　医師とする明証は得られていない。「林庵」なる号が医師としてのそれである可能性は皆無でないから、今後の探究が必要である。

編著　書名を正しくすれば問題はない（後述）。

以上の検討により『誹家大系図』の記事は左のように訂正される。

顕成（あきなり）　姓は阿知子（あちし）氏。また山井氏と別称か。顕成は実名。通称、作左衛門。入道して林庵と号す。堺北庄の人。業は医と伝えるも未詳。家書、境海草・続境海草・手繰舟。

さて、長らく不明であった顕成の生没年は、『土橋宗静日記』によってほぼ確定できるようになった。この日記の概要は前田金五郎氏「土橋宗静日記」（『船場紀要』7号、昭和53年2月）に紹介されているが、前田氏の御教示によると、天和三年の部、六月十五日の記事につづいて左の二項がある（濁点、句読点ならびに傍線は永野のもの）。

一、松や浄喜覚書ノ反古ノ切、箱ノつめニして有之候、見出候間、書付置候。堺硯や作兵衛子助三郎ト云惣領、去辰年四月三日ニあぼしかりや村まさきや忠兵衛ト云船頭養子仕連帰候也。〔中略―永野〕去辰ゟ当年迄八年ニ成也。

一、堺俳諧師林庵同辰卯月十日ニ大坂ニ住宅めされ候四十二才ニ而死去也。

右弐ヶ条写置候。

傍線部を宗静の注記と認め、日記中の他の記事を参看するとこの記事は次のように解される。宗静の母の実家、堺の松屋浄喜は過ぐる天和元年十一月二日死去し、翌二年五月同家は悪疫流行と商売不振により没落した。天和三年六月、宗静はたまたま箱の詰めものに

使われていた浄喜の覚書を発見し、その中で関心ある二つの事項を日記に写し留めたのである。硯屋の一件は当面の問題に関係がないのでさておき、林庵に関する第二項について考えるに、いささか文意不明瞭である。「同辰」は前項での宗静注記から延宝四年であるが、その四月十日が林庵の大坂に居宅を構えた日を示すか、それともそこで四十二歳で死去した日を示すかは、他に資料を得なければ最後的に確定できない。いま詳述する紙面がないが、顕成の生存を確実に示す下限は延宝三年に西鶴の亡妻追悼に句を送っている（西鶴『独吟一日千句』）ところまでで、四年以降いくつかの俳書に少数の句が収められはするものの必ずしも生存を確証するに足りない。ことに延宝九年頃刊の堺俳書『堺絹』（現存は春・夏合一冊）に一句も見えぬことは遅くともこの書の編集の頃までに世を去ったことを暗示する。大胆に過ぎるかも知れぬが、これを死没の日と見て、顕成の略伝を綴ることとする。逆算して寛永十二年（一六三五）出生となる。主なる事項にはこれによって年令を付記する。

顕成は堺の連歌壇から生まれた俳諧師である。慶安五年（一六五二、18歳）の大坂天満宮奉納『菅家神退七百五十年万句』に見える「顕盛」は用字に不安が残るけれども翌年以降の活躍は確実である。すなわち、承応二年（19歳）九月二十四日、里村南家の祖白の発句で堺において興行された百韻（島津忠夫氏「連歌壇より俳壇へ」、『芭蕉の本3蕉風山脈』角川書店）、同三年四月五日より平野郷の権現社において興行された千句（大阪大学土橋文庫『於権現千句』）に出座する。前者の連衆は、利広・以春・栄全・宗久・以益・祐巴・宗智・以円・顕成・久任。後者の連衆は、宥済・正音・宗因・以春・宗雄・宗久・以円・清順・之貞・顕成・利広・延明・宥仙。堺（利広・以春・以円・顕成など）、平野（宗久・清順など）、天満（久任・宗因）の三連歌壇の親交が知られる。また、今知られるところでは、平野権現千句は顕成が宗因と同座した最初である。

顕成が俳書に初登場したのは明暦二年（一六五六、22歳）正月刊の大坂天満蔭山休安撰『夢見草』で十一句入集する。この年九月宗因の新宅向栄庵の新築成った折のものと推定される百韻に出座（中村俊定氏「松江重頼年譜」、『俳諧史の研究』笠間書院、昭和45年）。連衆は重頼・宗因・以春・玖也・顕成・祐是・忠由・保友・三政・宗立で、『手繰舟』に玖也判の発句合を収めるのも両者の交わりがこのように早くから結ばれていたからであった。

顕成はその短い生涯に三つの俳諧撰集を世に送った。もちろん、これは寛文年間の堺とその周辺におけるめざましい俳諧盛行の結果であった。

万治三年（一六六〇、26歳）、彼の第一撰集であり堺俳壇最初の俳書『境海草』二冊を刊行（『古典俳文学大系3談林俳諧集一』に翻刻）。『夢見草』に登場してから四年、しかも若輩の顕成が、編集半ばに没した那賀盛之のあとを継ぐことになったのには、彼の連歌壇の地位が作用していたのではなかろうか。

寛文十年（一六七〇、36歳）、第二撰集『境海草』五冊を刊行（これも上掲書に翻刻）。「寛文十年庚戌八月下旬」自跋の愛知県立大学蔵本（但し第五冊のみ）が初版で、「寛文十二壬子初秋吉旦」と自跋の年月が改められた東京大学蔵本は再版であろう。

寛文十二年（一六七二、38歳）、第三撰集『手繰舟』を刊行。

西山宗因の入句は『境海草』に「一幽」の名で発句26、付合10組、『続境海草』に「西翁」の名で発句94、付合17組、『手繰舟』現存

四冊に「西翁」の名で22句であるが、米谷巌氏の調査によれば、これは抜群の量である（「新編梅翁発句集草稿」、『近世・近代のことばと文学』昭和47年）。顕成の俳諧史上の位置を考えるに、彼は早く宗因に親炙、傾倒して「宗因流」の宣布に寄与しながらも、若死にしたこともあって、延宝期の談林盛行の波に乗って華々しい活躍を見せることなく終わった過渡期の人というべきであろう。顕成が大坂に住宅（おそらく別宅であろう）を持ったのは、俳諧の新しい推進力が大坂に移りつつあったことの一指標と見なすべきであり、彼がもし若死にしなければ新風興隆の中にあらたな一つの役割を果たしえたと、想像すべきかも知れない。

なお、『手繰舟』刊行当時の土橋家の当主、宗静と顕成の交渉について一言触れておかねばならぬ。宗静は顕成より一歳若い。寛永十三年に生まれ元禄十一年に没した。顕成の撰集のすべてに入集する。『境海草』に9句、『続境海草』に5句、『手繰舟』に24句。そればかりでなく、『土橋宗静日記』に両人の俳諧における親密な風交の記録がある。（濁点、句読点は永野のもの）

寛文十年（一六七〇、顕成36歳）の部に——

一、八月十八日ニ堺清雲院さま七回忌ニ而罷越、則、十九日とまり申、阿知子顕成と俳諧仕候。

えびす嶋にて　宗静

朝霧や其まゝ絵島えびす嶋

十九日晩ニ　顕成

今度二夜かけて契るや月の友

御物がたりも聞し雁がね

右五十韻づゝ仕候也。

延宝二年（一六七四、顕成40歳）の部に——

一、十月十九日ニ堺阿知子顕成入道林庵、谷吉右衛門、幽明など御出ニ而御滞留、俳諧興行仕候也。当庄ゟハ清順・広之両人呼出候也。

句をひとつ拾ハゞ道の落葉哉　顕成

ふところ紙も白き朝霜　宗静

手拭の雫にうつる月寒て　永重

などゝ云て百韵あり。

我等庭の松を　永重

雪にさぞふかバひら野の松の景　宗静

御酒進じたや風寒き夜　幽明

又我等所望にて

熱音や嵐にかよふ雹釜

氷る水屋の軒の松か枝　宗静

などゝ云て一折づゝあり。廿日ニ御帰也。

このように親しんだ宗静なればこそ、反古の中のふと眼にとまった顕成の死去に関する記事を日記に書き写したのであった。『手繰舟』がこの家に伝わってからくも完全な散佚をまぬがれたことも、何やら因縁話めくが、偶然ではなかったと言うべきか。（80・6・19）

（付記）本稿を成すにあたり神宮文庫、東大図書館、愛知県大図書館、天理図書館、堺市立図書館の文献を利用させて頂き、また、岡田利兵衛、岡田彰子、岡村平兵衛、小谷方明、米谷巌、今栄蔵、島居清、田中邦夫、長友千代治、中野沙恵、前田金五郎、森川昭の諸氏には種々御教示に預った。記して謝意を表する。

（大阪経済大学助教授）